

良質な問いは、良質な思考を生む

2026・9・2 重枝 一郎

人は、自分のこれからを変えたい、自分を変えたいと思い、情報を探し、アドバイスを受け、答えを見つけようとする。しかし、その答え、方法、ノウハウなどで変わることはない。つまり、他人が与えた答えは、気づきを生まないからである。

「良質な問いは、良質な思考を生み出す」という言葉は、ずっと私の心にとどまっている。この言葉は、コーチングに興味をもつきっかけにもなったと思う。「問い」について興味をもつと、教科指導や生徒指導、部活動指導が変わった。行きついたのは、『理想の「問い」』の定義である。

『理想の「問い」』は、生徒の一生の記憶に残り、その心に問い続け、成長につれて答えが変わっていくような「問い」で、それが「良質な問い」である』。

私は、AL や ICT 活用など流行的な学びも大切も大事だが、不易の部分としては、「問い」について学び、考えることだと思う。「問い」は、生徒の強烈なエネルギーを生み出す。

自分への「問い（質問）」が主体性を生み出す

「問い」というと、他者から答えをもらいたがっているような態度で、主体性がないような印象を受ける。そうではなく、「問い」とは、自ら積極的に答えを探し求めるために行うものである。特に、自分への「問い」は、自分で考える力を最大化する方法になる。つまり、自分自身に問うと、頭が自然と答えを探そうとし始める。答えが出なかったら・・・？ しかし、「問い」には「問われると答えたくなる」という特徴がある。クイズ番組を見て、ちょっと考えようとする時点で、すでに思考が始まっているのはそのためである。

また、自分自身に問うてみても、うまくいかないと思う人も当然いると思う。それは、うまくいかない人は、うまくいかない「問い」をしているからである。うまくいかない時、自分で無自覚に問うているのは、「どうしてうまくいかないんだろう」ではないだろうか。これは、気分がどんよりし、落ち込む流れの悪循環、自己洗脳だと思う。この無自覚な「問い」を「どうしたらうまくいくかな」の「問い」に変える必要がある。そして、言葉の上では、「どうして（理由）」を「どうしたら（方法）」に変えて、「できること（可能性）」に焦点を当てて、「前向きに考えるクセ」をつけていくことで、できることが増えていく。

「質問駆動型学習」という言葉を知っているか

今、発問型学習と呼ばれるものが安定した人気を得つつある。探究学習をするようになってからはなおさらである。誰であっても、自分が知りたいと思うことの答えを求めるとき、真剣になり、自己成長につながる。だから、生徒自身の発問を中心に学びを構成するのがよいという考えである。その手法として、「質問駆動型学習」を参考にすることができ。ぜひ調べてみて。